

保育者養成校におけるピアノ初心者のための指導法

—Marionette Uszler 他著 “The Well-Tempered Keyboard Teacher” を参考に—

松井 典子^{*1}

Piano Pedagogy for the Beginner Players as Students at Nursery Teacher
Training Institution

— Considering “The Well-Tempered Keyboard Teacher” by Marionette Uszler,
Stewart Gordon and Scott McBride Smith —

Noriko MATSUI

キーワード：保育者養成，成人，ピアノ初心者，ピアノ指導法

1. はじめに

保育士・幼稚園教諭を目指す学生のピアノ学習歴は、経験はあるがブランクを持つ者、受験をきっかけに習い始めた者、全くの未経験者と様々である。幼少期から継続してピアノを習っている学生は僅かであり、未経験者か初心者に近い学生が大多数である。近年さらに、未経験者の割合が増加している。

このような現状に於いて、保育者養成校におけるピアノ奏法に関わる授業では、特にピアノ初心者の学生に対して短期間で効率よく演奏技能を習得できるよう指導することが非常に重要である。そのためには、指導内容にも様々な工夫が必要であると考えられる。

本論文ではまず、主に米国の音楽大学のカリキュラムにあるピアノ教授法 (Piano Pedagogy) の授業でテキストとして使用され、ピアノ教授法の書籍としてベストセラーになったマリアンヌ・ウズラー (Marionette Uszler, 生年不詳)、ステュワート・ゴードン (Stewart Gordon, 1930～)、そしてスコット・マックブライド・スミス (Scott McBride Smith, 生年不詳) 共著の “The Well-Tempered Keyboard Teacher” (2000, Second Edition) における第1部「初心者の生徒」の第3章「成人の生徒」を翻訳し紹介する。この章では「成人」の心理、思考力、身体の運動能力の特徴に注目し、それぞれがピアノ演奏に際しどのような有利な点、不利な点があるかを比較し論じている。さらに、これらの見解に基づくピアノ指導法を提案している。

^{*1} 滋賀短期大学 幼児教育保育学科

保育士・幼稚園教諭養成の為のピアノ指導において、指導者が「成人」の生徒の性質を認識することは、多様な指導法の可能性を広げるのではないかと考える。このような目的のため、本論文では、当著書の一部において述べられた見解を参考に養成校におけるピアノ指導法について考察していく。

2.1 著者について

本論文で取り上げる第1部第3章は、ウズラーおよびレナ・ウプティス (Rena Uptis 生年不詳) との共著である。ウプティスは、当著書、第1部第1章、第2章、第3章そして第4部14章に寄稿している。

ウズラーは、米国、南カリフォルニア大学で永年鍵盤学科の教授を務め、学部および大学院に於いてピアノ教授法 (Piano Pedagogy) の科目を設立し、“American Music Teacher”, “Piano & Keyboard” 等米国の主要なピアノ教授法の雑誌編集者の一人で書評家であり、米国、カナダ、イギリス、オーストラリア、韓国、フィンランドでワークショップを開催している。

ウプティスは、カナダのクィーンズランド大学で教育学部の大学院教授を務めている。著書に “This Too Is Music”, “Can I Play You My Song?” があり、音楽、数学、カリキュラム研究、方法論の教科を担当している。

2.2 “The Well-Tempered Keyboard Teacher” の構成

本書第2版は、第6部第25章で構成され、初心者、中級者、上級者の為のピアノ指導法、練習法、ピアノテキスト、レパートリーの紹介、ピアノ教育の歴史などが具体的に記載されている。さらに、第2版の特徴として「Stop and Think (立ちどまって考えてみよう)」の項目を加え、それぞれの章で議論される事柄に関連した疑問を読者に投げかけている。

第1部は、第1章に幼児、第2章に初等教育課程、第3章に成人とそれぞれの初心者を対象としたピアノ指導法が述べられている。

各部と内容については下記の通りである。(第2部以降の各章の内容は省略する。)

- 第1部 初心者の生徒
- 第2部 中級の生徒
- 第3部 上級の生徒
- 第4部 ピアノ教師について
- 第5部 博識なピアノ教師
- 第6部 ピアノ教育学の歴史概要

3. 本論「成人」について

本稿では、第3章において特に重要であると考え次の3つのテーマに焦点をあて論じていく。

1. 成人の学習者は経験的知識に基づく技能を保持している
2. 運動技能と成人
3. 成人は考え（意見）をもつ

なおウズラー、ウプティスは「成人」学生を次のように定義している。

- *10代の若者
- *大学の非音楽専攻（一般的に18歳から24歳）
- *大学の音楽専攻（一般的に18歳から24歳）
- *ピアノを楽しむために学習したい成人（25歳からそれ以上）

ウズラー、ウプティスは、成人の思考力、心理、身体の運動能力の特徴に注目し、ピアノの習得方法や成人がピアノを習得する際の有利な点、不利な点を分類し、さらに、これらの見解に基づくピアノ指導時のコツを提案している。次項よりそれぞれのテーマについて両氏の見解を引用し、表にまとめ紹介する。

3.1 成人の学習者は経験的知識に基づく技術を保持している

ウズラー、ウプティスは、成人の初心者の特性を次のように説明している。

成人は蓄積された情報、経験、そして新しい技術の獲得に応用できる考えを保持している。これらの多くは、言語によるコミュニケーションによって学び表現されたものである。ほとんどの日常の状況で成人はうまく何事も対処できるので、初心者であることは滅多にない。ゆえに、ほとんどの成人は、「初心者」である経験は、心浮きたつものではなく、不安定な気持ちになるものである。成人は、一歩引くことによって状況を把握し、また、行動したり感じたりする前に新しい状況について話し合うことによって、この不安定な気持ちを補うかもしれない。彼らはよくやってみたり、試す前に分析したり細かく調べる（Uszler 2000: 57-58）（下線部による強調は筆者による。以下同様）。

ここでは、成人の「初心者」としての経験について心理状態を分析している。当然の事として見過ごしてしまうこのような点について指導者は、改めて成人の「初心者」である心理状態を理解する必要があると考える。

表1では、既知の経験が豊富で、思考力をもつ成人の有利な点、不利な点、指導時のコツを説明している。

保育者養成校におけるピアノ初心者のための指導法

表1 思考力を保持する成人

有利な点	不利な点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 集中力が長く続く ・ 特に活動に興味深く多様であれば ・ 独学ができる ・ 言語コミュニケーションにすぐ反応できる ・ 関連した事柄を理解しようとする ・ 難しい箇所を示し、質問をすることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定義が何であるかを体験するよりも定義について一層興味がある ・ それぞれの手順を分類する傾向がある ・ 感覚や記憶を頼らずに知識や手順を分類する傾向がある ・ 起き得ることよりも前に言葉にしてしまう
<p>指導時のコツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 必ず体験を理論に先行させる ・ 拍子, リズムに関して言えばこれは特に重要 ・ 成人は独学が可能で、楽しむことができることを認識し、注意深く課題を選曲する ・ 説明しすぎるのを避ける ・ 音楽的な方法のみで伝え、説明するよりも実演する ・ どんなに短く簡単なことでも学生が様々な成功体験を持てるように準備する ・ レッスンや授業以外の他の方法を提案する ・ 例：練習を録音 コンサートに出かける 初見で弾くことができる課題を与える ・ 一方的で威圧的ではなく、慎重に伝える ・ シンプルに、分かりやすく質問に答える ・ 複雑な話に巻き込まない ・ 多くの質問をし、注意深く返答を聞く ・ 事実や理論よりも意見を要求する質問をする 	

3.2 運動技能と成人

この項では、成人の身体的特徴を幼児と比較し次のように説明している。

幼児とは違い成人は、広範囲の運動技能が発達していて、多くは鍵盤を弾くのに応用できる。成人は子供が学ばないような（気づかない）方法で動作の使用方法における（実際に弾く）タイミングや正確さの重要性を知っている。より機敏な動きをするよう目と手の動き、書くこと、物をつかむこと、そして表現豊かな身ぶりをすることもすでに習得している（Uszler 2000：59-60）。

身体的特徴に関して、幼児と比較し、成人がピアノを習得することの利点を述べている。また、成人は幼児に比べ、日常の中で様々な複雑な身体動作を既に経験し使用している。ウズラー、ウプティスは、成人の日常の身体運動のパターンがピアノ上での身体運動のパターンとどのように関連し、相違があるのかを具体的な事例を挙げ述べている。

成人は、適応能力や方法で既に体を使えるようになってきているからこそ、動きのパターンや身ぶりを変えることをより難しいことと感じる。成人にとって、特定の状況で柔軟な動きは、他の状況では緊張し、こわばったものに簡単になり得るかもしれない。例えば、トランクの

蓋をボタンと閉めるために腕を上げることは、鍵盤の上で新しい位置に動かすために腕を上げるのと同じではない (Uszler 2000 : 60)。

次に、ピアノを弾く行為は、身体と心理が相互に関連しているということを説明している。

体のぎこちない動きや硬直は、成人の場合は、体が特定の行為を実際にできないということよりも、心的緊張の表れによるものである。成人は、かなりの精神的な指導やアドバイスをなしにして、体を動かすことを難しく感じている。また、辛抱強く我慢するように成人に伝えることもたいていの場合非効率的なことである。目先の楽しみなく成人に自信を持ち続け熱中する方向にもっていくためには、目に見える成功や達成感を味あわせること（体験させること / できたという達成感）が必要になる。教師は、成人に運動技能を練習する十分な機会を提供し、その過程で精神的に消化する（できたという）フィードバックシステムを確立しなければならない (Uszler 2000 : 60)。

表2では、成人の運動技能の視点からピアノ習得法を具体的に提示する。

3.3 成人は考え（意見）をもつ

前述の「成人」の定義で示したとおり、成人の学習者は、ある目的をもって自らピアノを学びたいと思いピアノを始めている。それぞれの目的や目標により、ピアノの習得内容や願望は千差万別である。この項ではさらに、指導者は、どのような指導計画・考え・態度で成人初心者に対して指導をすべきかを述べている。ウズラー、ウプティスは、次のように言及している。

ある人は、一時的な楽しみを望み、数曲の有名な旋律を演奏し満足するかもしれない。他方では、いつもピアノ奏法に関する「秘訣」や「基礎」を知りたいと思い、読譜の仕方、拍子の取り方、指の動かし方、そしてペダルの踏み方を学びたいと願う。(中略)しかし、音楽家や、少なくともピアニストとしてキャリアを築く予定の人はほとんどおらず、ただ鍵盤を心地よく弾く域を超えて技術を学び完全なものにしたいという差し迫った熱望はない。しかし、大多数の教師は、昔から教育されてきた為、ある程度のレパートリーを学ぶことと共に技術的上達に重きを置かない鍵盤指導を想像するのは難しいと思われる。生徒の多くは、実際に継続したピアノの学習をしない。しかし、教師は、長期目標という観点で指導することに慣れている。彼らは、幼児に対する指導のように手が成長し、集中力が高まり、ペダルを踏むことができ、読譜が容易になり、それ相応に音楽に関する高度な知識が発達するだろうことを予測し、将来を考え指導計画を立てる。成人は、長期間レッスンを受ける可能性が低

保育者養成校におけるピアノ初心者のための指導法

表2 運動技能を保持する成人

有利な点	不利な点
<ul style="list-style-type: none"> ・身体がピアノに合う 楽器のデザイン→成人が演奏する前提 問題なくペダルが踏め、鍵盤の端から端まで手がとどく ・鍵盤全体（端から端まで）を見渡すのに十分な背丈がある ・比較的容易にオクターブが届く ・学習の始めから和音での演奏が可能かもしれない ・素早い運動動作をコントロールし、楽しむ ・身体と楽器、それぞれの資質（性質）を活かした関係性を活用できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を仕上げる事、早く弾くこと、力任せに完璧に間違わない演奏に目標を置き、無理をする結果的に余計な緊張を生じる ・新しい動作の習得に時間を費やし、試行錯誤し練習を積み重ねる事を嫌がる ・成人はいつも効率的な方法に固執する ・レッスンや練習時に体力的に疲労し、ピアノを弾く行為を負担に思う ・自己批判の傾向がよくある ・ネガティブに考えることが進歩を邪魔する ・ピアノ以外の様々な場面において正確で完成した運動能力を既に保持しているので、指示的なアドバイスを拒絶するかもしれない ・起り得る成功や失敗に先入観を持ち、慣れない運動技能に取り組むことがよくある
<p>指導時のコツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初からリラックスした姿勢や態度を強調する ・ウォーミングアップできるようレッスンや授業中に計画する ・ウォーミングアップは必ずしも技術そのものに関心を向けるものではなく、手をたたき、足踏み、スウィングや歌うことにより、成人にリズム活動を体験させることの価値を侮らない ・ジェスチャー（身体動作）は多ければ多いほど効果的である ・レッスンや授業中、成人は集中力が持続するので、身体の緊張や疲れが出やすいその為、時々体操（伸びをする、曲げる、手や腕を振る）や集中力を意図的に中断させることを提案する ・短時間、身体的なテクニックに取り組みさせる ・最初、成人は基本的なジェスチャー（身体動作）に細心の注意を払うことができる ・成人に一度にテクニック、読譜、リズム、拍子などに注意を払うよう要求しない ・読譜やリズムの複雑さを含まない、短くすぐに覚えられる単純なテクニック練習課題を与えることがベストである ・明確な練習目標を渡す ・長い課題のテクニック練習をするよりも、身体が何をし、何を感じているかに十分向き合い、集中力が保てる短くて繰り返し練習できる課題が適している ・成人はやりすぎる傾向がある ・単に習慣的な練習ではなく、身体が覚えることに重きを置く ・身体が心地よく、協調して動いていると感じるまで成人にジェスチャー（身体動作）や運指を指導する ・成人が身体の反応に気づいているか見落とさないようにする ・そのような注意を刺激する質問をする 	

く、将来的には備わるだろう様々なテクニックを習得するために我慢強く取り組む意思はない。教師は、成人に対し、より当面の目標（短期目標）という観点から指導案を考えなければならぬ。成人初心者と教師の両方が、ピアノを弾くことについて考えがあることに気づくことが重要である（Uszler 2000: 62）。

4. 養成校におけるピアノ初心者に対する指導法について

ウズラー、ウプティスの見解を参考に養成校における指導法を考察していく。

表3 成人は考え（意見）をもつ

利点	不利な点
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ・レッスンを受けるために時間やレッスン費用をつぎ込む 成功体験やそこから何かを得たいと望む ・自己表現の方法としてピアノを弾く 従って、意見、提案、批判は自己を反映したものと受け止められる 成功した演奏はその結果として自尊心を高める効果がある ・目標設定ができ、目標到達の為に結果を待つことの必要性を十分理解できる 原因と結果の概念が理解できている 〈練習・結果・達成の関係性〉を辛抱強く我慢できるかもしれない ・好き嫌いの意見を表現するのが上手く、理解できない事柄について質問する（意思表示） 従って、教師はより明確に状況を認識し、応じることができる ・学び、自分の知識になる事は何にでも大変興味がある 従って、生徒にとって刺激があるのと同様、教師にとってもレッスンはより有意義であるかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動技能（演奏すること）において、テクニックを簡単に習得するために費やす時間に非現実的な期待を持つかもしれない ・即効性のない練習に対し我慢できないかもしれない ・成人は抑制力を備え、他者に対する関係の中で自身の達成感、意見や態度を評価することがある そのため試行錯誤する練習に殆どの成人は受け入れ難い ・幼児が簡単にできることは、成人は本能的に完璧にできなければならないと思ひ、失敗を恐れる ・演奏中のあらゆる失敗（間違い）に対し、イライラし自信を失う ・ピアノを演奏する行為がいかに複雑であるかを認識できていない ミスなく、皆に認められる演奏の基準に達することや時間やエネルギーを費やすことに気づき始めると落胆する ・真面目さや努力することは練習量であると信じこみ、練習する内容や目的を見失っているかもしれない
<p>指導時のコツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力的な雰囲気を作る ・多様な楽曲や音楽活動の選択を提案する。同じ目的に適ひ、成人それぞれに最も魅力的な意味のある課題を選べる教材を示す ・時々成人が音楽的に責任を持てるようにする（例：テンポ設定、運指の提案、強弱やアゴーギク） ・振り返りの時間を用意する ・いつも励ます、しかし誠実に ・判断や意見を必要とする質問をする ・レッスンや授業で成功体験できるよう多くの短い補強練習、楽曲、活動を準備する ・完璧な演奏のみが受け入れられる雰囲気を作らない ・どの箇所も一度に仕上げない。特に初めはその時々において様々な事柄を強調する—時にはリズムの正確さや強弱、時にはテンポ設定など ・音楽活動や表現には正しい解答は一つもない 例：伴奏スタイルの選択—生徒が考え、感じ、理解して演奏することが大切 ・グループで学習しないとしても成人学生に演奏を発表できる機会を作る この演奏体験が他者との対話を促し、音楽作りを共有することにつながる 教師もこれに参加する ・ユーモアのセンスを持ち続ける 良いタイミングで言葉をかけるより、リラックスさせ、フラストレーションを解消させることが大切 	

4.1 有利な点、不利な点の見解から

表1, 表2, そして表3で成人初心者がピアノを習得するための有利な点、不利な点が示された。3つのテーマでの共通点は、成人は、既に蓄積された情報、経験、そして新しい技術の獲得に応用できる考えや身体能力を備えているということだ。その中で成人において有利な点は、幼児の初心者とは違い、身体の広範囲な運動機能が発達し、その結果それをピアノ演奏に応用でき

ることである。反対に、不利な点は、心理的に指示的なアドバイスを嫌うこと、そして試行錯誤や忍耐を伴う練習を受け入れ難いこと、完璧な演奏（ミスタッチなく弾くこと）を最優先課題とすることである。このような視点は、養成校のピアノ初心者の学生にも見受けられ、注意しなければならない点である。ウズラー、ウプティスの見解のように、指導者は、学生の心理的、身体的な特徴を認識し、学生自身がピアノ習得の取り組みの中で成功体験や達成感を味わうことができるピアノ指導を考案すべきだと考える。

4.2 指導時のコツの見解から

4.2.1 身体運動に着目した指導法

ウズラー、ウプティスは、初心者がピアノ技能を習得するためにピアノという楽器から離れて身体全体で音楽の基礎（リズム）、ピアノの基礎（姿勢、身体の使い方、運指等）を体験する方法を多数述べている。養成校において、特にピアノ初心者の学生は、音楽の基礎（リズム）をピアノを弾く前に習得することは効果的であると考えている。リトミックの創案者、エミール・ジャック＝ダルクローズ（Émile Jaques-Dalcroze 1865～1950）も同様に、「楽器演奏の前に音楽の基礎を習得することの必要性」（ダルクローズ 2003: 68）や、「筋肉感覚によるリズムの理解」の重要性（ダルクローズ2003: 81）を説いている。

筆者は、養成校におけるピアノ奏法に関わる授業の中でもリトミックの要素を取り入れた指導方法は有効であると考えている。例えば、読譜の段階ではピアノを使用せず、リズムを手拍子、若しくは、ステップを踏んで身体全体で体験し、理解することも一つの指導方法であり、また三連符や付点のリズムなど、初心者にとって複雑だと思われるリズムには、「ことば」をそのリズムに当てはめ、拍を手拍子リズムを理解することも有効であると考えている。

4.2.2 ピアノを演奏する姿勢について

ピアノの基礎を習得する際、ピアノを弾く姿勢に関して注目したい。指導者は、リラックスした身体状態を学生に体感できるよう、身体が緊張した状態、または弛緩した状態を体験させ、学生自身が認識できるよう指導することが必要である。そのうえで、身長や腕の長さに合った椅子の高さを示し、椅子に腰かけた時の身体全体のバランスについて観察する時間を大切にしなければならない。一度リラックスした状態を体験することによって学生は、練習やレッスン中の緊張や身体の疲れに対して自ら対処することができる。

4.2.3 課題曲の選曲と練習方法

本書では、ピアノ課題の選曲や練習法について述べている。ピアノ演奏技能習得の課題は、複雑でなく、短く、繰り返しでき、尚且つ身体動作を確認できる楽曲を選曲すべきであると述べら

れている。養成校では、一般的にテクニックの向上を目指す教則本と保育現場で使用する弾き歌いの楽曲、ブルグミュラー (Johann Friedrich Franz Burgmüller 1806~1874) による『ブルグミュラーの25の練習曲』、ソナチネ曲集などを課題にしている。教則本の課題は、運指、指のテクニック (レガート奏、指のくぐり、同音連打、和音や分散和音の伴奏法等) と様々な要素が含まれる。初心者の学生にとっては、特に教則本の練習では、読譜の段階から時間を要し、精神的にも、体力的にも消耗する場合がある。養成校では、特に履修科目が多く、ピアノを練習する時間が十分に取れない事が多い。従って、練習課題に関しては、指導者が学生に対し、技術習得の目的を明確化し、どのような技術を習得するための課題であるかを分かりやすく伝える必要がある。目的もなく、ただミスタッチなしに、何も考えずに反復練習することは、限定されたその場限りの技術を習得するにすぎず、演奏技能の積み重ねや技術の応用活用をすることはできないからである。

指導者が、初心者の学生に対し、教則本で必要とされるテクニックを前もって短く、また繰り返してできる練習曲に編み出し、それを提供することを筆者は提案したい。

4.2.4 多様な授業形態の提案

養成校の授業内容、そして授業形態について述べたい。ウズラー、ウプティスの記述では、成人学生徒に人前で演奏する機会を与えることを指導時のコツに挙げている。養成校のピアノ奏法に関わる授業形態は様々で、グループレッスン、個人レッスンなど多様である。ここでいう「人前での演奏」は、養成校では、グループレッスンや試験において指導者などの限定的な対象の前で行われることが一般的であるが、将来人前での演奏に携わる学生に対し、発表会のような学生達同士のうちとけた雰囲気の中で、人前での演奏の場を学生に提供することは有意義な活動の一つであり、メリットが多いと考える。その理由は、まず客観的に他者のピアノ演奏を鑑賞する経験ができ、また人前での演奏における自己の心理状態、身体状態を確認することができるからである。他者の演奏を様々な視点から客観的に見ることにより、今後の自己の演奏に活かすことができるであろうし、発表会を開催することによりレパートリーの強化や、演奏終了後振り返りとして自己の到達度の確認や学生間同士で演奏についての感想や意見交換も活発にできるであろう。

4.2.5 指導者への提言

最後に、指導者と学生の音楽づくりについて述べる。ウズラー、ウプティスは、音楽表現には絶対的な正解はないと述べている。指導者は、レッスンでリズムや音間違い、テクニックだけを主眼とした指導にとどまらず、たとえ初心者であっても時には学生からの自発的な表現に対する考えを聞くことは大切なことだと考える。初心者であっても、ピアノの上達段階で、学生自身が様々な考えをもつことがある。その時に指導者は、一方的で指示的な指導のみならず、音楽表現に関して対話をする時間を設けることも必要である。保育現場において保育者と子どもとの関

わりの中でこのような対話はあらゆる場面で存在し、学生の表現活動の伸長に必要な不可欠である
と考える。

5. まとめと今後の展望

これまで、「成人初心者」のための多様なピアノ指導法の可能性を著書の見解を基に述べてきた。著書の見解通り指導者は、「成人学生」の特徴を認識することにより、多面的なピアノ指導法を考案する事ができる。これによって、成人初心者の学生にとって、身体の使い方を認識することが演奏技能習得に有効な方法であり、ピアノの取り組み方や練習方法の指導によって、ピアノ習得に影響を与えるということが確認できる。このことを踏まえ指導者は、成人の思考力、運動技能、意思に傾注する必要がある。特に成人初心者には、保育現場で実践できる目的に合った練習課題の提示をし、演奏技術、さらには音楽表現についても習得できるような的確な指導をしなければならない。著者が述べるように、特に指導者は、成人初心者が達成感を味わうことができ、自己成長ができていと実感することで、ピアノへの興味や上達につながるということに気づかなければならない。さらに大切なことは、保育現場で求められる演奏技術や授業内容が、保育現場と決して乖離のないように指導者が留意することである。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、翻訳でお力を貸していただきました阿部瞳さんに心より御礼を申し上げます。

(本稿は、日本音楽表現学会第14回大会2016年6月における口頭発表の内容を基に執筆したものである。)

【引用文献】

- Uszler, Marianne, Stewart, Gordon, and Scott, McBride, Smith. 2000 (2nd ed.). *The well-tempered keyboard teacher*. Belmont, CA:Wadsworth/Cengage Learning.
- ダルクローズ, エミールジャック/山本昌男訳 2003『リズムと音楽と教育』東京:全音楽譜出版。(Jacques-Dalcroze, Emile. 1965. *Le Rythme, La Musique Et L'Education*. Lausanne: Foetisch frères.)